

虫の音面白く聞える中から、白い煙の折々立つのは、舟に何やら炊ぐのであらう。

次第に島をめぐる程に、低い屋根の家幾つか、まるで日本の畦倉の様な物で、一部落を爲した所へ出た。するとまたその小家から、折々聞える鳴物の、琵琶かと床しく思はれるに、聞けばピナと云ふ樂器とやら。其の名の似て居るさへ面白い。

東坡が赤壁の舟遊も、恐らくこれほどではあるまいと、何れも快哉を叫ぶ中に、舟はまた元の廣い入江へ出ると、こは如何に！今は水蒸氣の只朦々として、月の居所さへ解らなく成つた。見ると夜は十時に近い。

約束の二時間はまだ経たぬが、先刻から漕ぎつゞけて、定めし船頭も草臥れたであらう。少しは腕を休ませて、残りの下物でも取らせやうと、余はまづ少年を呼んで、

『どうだ少し休んで、これでも一杯やれ！』

と、ビールを出して見せたが、彼は手を振つて居る。それではこれとは、ラムネを出したら、彼は嬉しそうに片手を出して、一杯を息もつかずに飲んだ。

『さ、下物もあるぞ。休んで食へ！』

と、云つても、一度ではなかく休まない。再三余が云つたので、漸く手を休めたが、まだ下物には手を出さない。

成る程これは、其手に渡さなければ食ふまいと、余はサンドウ井ツチ三片と、バナ、二個とを取つて、わざ／＼その手に載せてやると、彼はそれを幾度か押し頂いたが、一つだにそれを取らうともせず、そのまゝ、怪しげな紙に包んで、船の底へしまつて居る。

「オイ、何故食はんのだ？ 遠慮せずに食つたらいゝぢやないか！」と、云つても只へい／＼云ふ計りて、皆形付けてしまふのである。余は少し變に思つたから、好事にその側へ言つて、

「何故直ぐに食はんのだ？ 嫌なのか……それとも腹が張つてるのか？」

と聞くと、彼は頭を振りながら、

「いゝえさうぢやないんです。が……自家に親父が居りますか」と答へた。

自家に親父が？ さてはその父への土産に、手も付けずにしまつたのかと思ふと、余は感心せざるを得ない。

「さうか。自家に阿父さんが居るのか？」

「へい……」

「何をしてるのだ？」

「波止場の人足をしてるんですが、此間から病氣なんです。」

「そりやアさを困るだらう。て、今はお前一人が稼いでるのか？」

『さうです……けれども……年が行かないもんですから、いつも他の者に客を取られちやつて、あんまり仕事が無いんです。』

『さうか、可哀さうに……』
 こんな話をして居る中に、少年はまた漕ぎ初めたが、何時か本船近くへ来て居た。

『何うする？もう暫らく廻はらうか？』

『イヤ、もう空が曇つて来たから、よい加減に歸らうぢやないか。』と議は一決して、遂に本船へ着けさせる事にした。着けると云つても、直には着ける事が出来ない。即ち本船へ荷物を運んで来て居る、一艘の荷船へつけるので、余等はまづその荷船にあがり、それから

本船へ歸るのである。

が、元より端艇は小さし、荷船は可なり大きいから、舷と舷との差が五尺ほどある。それを人々はまるで器械體操をする様に、舷から舷へよぢ登つて、漸く本船へ歸つた。

其時少年には定め賃錢の他に、祝儀として半シリングと、飲み残しの一本のピーヤを、父への土産として與へたら、少年は満面に喜色を浮べて、幾度と無くその頭をさげた。

かう云ふ心掛の好い者に、多少に拘らず物を與へるのは、まことに心地のよいものである。

その翌朝、余は例の如く朝食を済まして、甲板の上を散歩して居

ると、海の方で聲高く、

「旦那！旦那！」

と呼ぶ聲がする。

誰かと思つて舷から見おろすと、これは昨夜の少年船頭で、例の船をあやつりながら、余の船近く寄つて来る。

余は帽を振つて答へると、彼はやがてその手に、何やら光るものをさし上げて、頻りに余に見せて居る。が、近眼の余にはよく解らない。

すると少年は、舷から下がつて居る錨網を、まるで猿の様に傳はつて、やがて甲板へ登つて来たが、余を見ると一禮して、

「昨晚の御忘れ物！」

と、云つてその光る物を渡した。それは一ポンドの金貨一個。思ふに昨夜船賃を拂ふ時、余の墓口をこぼれたものであらう。——が、余は今まで少しも氣附かなかつた。

「オ、さうか。それはわざ／＼難有う。だが、よく正直に届けてくれた。その御禮をやらなけりや成らん。」

と、余は又墓口をさぐらうとすると、彼は急いで手を振つて、

「いゝえ／＼！昨夜もう澤山頂きました。」
と、云ふかと思ふと、まるで脱兎か飛鳥の如く、舷側からヒラリ、ドブシ！海の中に飛び込むが早い、もうその船に歸つて、

「左様なら、御機嫌よろしう！
せつせと漕いで行つてしまつた。」

(三十六年稿)



九 怪力亂心

神を見たと言へば、信仰が深いと崇められ、幽霊に會たと云へば、それは神経だと嗤はれる。神、幽霊、等しく是れ、無形にして而も有形、見得る者には見え、信じずる者には信じ得るとすれば、同じ人間の分際として、彼を崇め、是を嗤ふは、甚だ譯の解らぬ話で無いか。

そんな理窟はまづ別問題として、兎に角この世界には、今分の人間の智識を程度としては、まだ、不思議な現象が多い。さればこ

そ此頃では、某々の有力な學者間に、心象會と云ふものが組織されて、専らその研究に腐心して居るが、此種の研究は、文明を誇る歐米諸國には、已に／＼流行しつゝあるので、スピリチスムとか、ヘキセンエーゼンとか云ふ言葉は、辭書の中でもはや古顔に屬して居る。

全體人間と云ふものは、生涯稚態を失はぬもので、二に二を加へて四になると云ふ、知れ切つた事を辨へて居るより、水の中から火が出たとか、死んだ者が口を利いたとか云ふ、玄妙不可思議な事柄を、強ひて見附け出さうとするものだ。

僕等の如きも實はその仲間なので、智惠の環は解けぬ中が面白く、

手品は種が解らぬので、見物もヤンヤと云ふ道理、世間には時々不可解の事があるので、實は興味を感ずるもの。若しこの人生から、「意外」「不思議」乃至「椿事」「怪聞」をマイナスしたら、殆んど蠟を咬む様なもの、一向變哲も無い次第であらう。

已に人間が、肉體と精神とで成り立つて居る以上、これを單位の物として扱ふのは、或は當を得た處置であるまい。肉體は肉體、精神は精神、形骸は形骸、靈魂は靈魂と、斯う本位を複式に立て、一々研究をして見ても如何か。

形骸は、たま／＼木伊乃となつた所が、一分も其場を動く事は出来ぬが、靈魂はよく數千萬里を往來して、何日何時、何處如何なる

所にも、現はれ、働く事が出来ると、斯うまづ理窟をつけて見ると、何うやら合點も行ささうになるが、それにしても、靈魂は無形のもの、それが現はれ働く時、往々有形の肉體を假りて、人間の眼に映ずるのは、抑も何うした約束であらう？

之に就ては斯う云ふ説もある。——現實ならざる形體の、偶々人目に映ずるのは、空氣、光線、依的兒などの、他の材料の作用があると、聞いて見れば、一應道理らしく聞えるが、それすら今日までの人智の程度で、知つたか振りに強解を試みたまで。人間以上の者から見たら、むしろ臍茶の沙汰ではあるまいか。

それよりも、その見える形體は、形體その物の働きては無く、

却つて之を見る者の、精神の作用であると解いた方が、陳腐な様でもまだ通りがよい。

然るに、また此説をも、横合からませ返へす現象がある。それは見る者の精神に、全く何等の豫期も無い時、若くは病的作用をも、全然起し得ぬ場合に、突如として眼に映ずるその物！ さアこれは何であらう？

彼のゲーテは、その作物中の人物を、殆んど眼前に現はれるまで、極めて明瞭に描寫して、爲めに室内に通る時、その架空の人物に、身を除ける真似をしたと云ふが、これ等は主觀的精神作用として、正しく前説で解く事が出来る。

然しアレキサンダア大王の、バビロンで客死した當時、マセドニヤ人は或る舞踏場で、正しく大王を認めたと云ふては無いか。而も大王その夜の扮装は、金色爛々たる戦時服を着け、さも物に疲れた如く、椅子に凭れて太息を吐いて居たと云ふ。

更にをかしいのは、自分で自分の姿を見たと言ふ話だ。これは十九世紀の初に、ベルリンからパーゼルへ赴任した、有名な神學の博士だが、ある夕方この人は、近所の知人を訪問しやうと思つて、何氣無く家を出た。出てからふと振り向いて見ると、自分の寢室に燈光が見える。——ハテ、誰も居らぬ筈だがと、立止まつて更に室内の内を見ると、思はずギョツとした。その寢臺の中に、燈火を手にし

ながら、何か思案に暮れて居るのは、誰あらう自分自身である。博士は更に瞳を凝らして、おつと自分自身を見たが、その姿は更に變らず、見れば見る程我その儘だ。博士は殆んど夢中に成つて、いきなり戸口を飛込んで、そのまま寢室へ入つて來た。

すると、不思議にもその姿は、もはや影も形も留めなかつたが、その代り天井裏で、恐ろしい物音がするので、驚いて身を除けると、忽ち天井を貫いて、大きな石が轉げ落ち、寢臺の頭を微塵に碎いた。

——なんと不思議な話ではないか。

此等の例に成つて來ると、主觀的精神作用では、何うしても解き得る問題であるまい。尤も人の死ぬ間際には、随分不思議な現象の

ある事は、古來實例も澤山あるが、僕の實驗した事で、未だに不思議に感じ、否、最近に於て、更にその不思議を増した話がある。それは他にも無い、長兄立太郎の死んだ時の話だ。

長兄は工科大學の教授をして居たが、永らく肺病に苦み、遂に明治二十三年の一月二十四日、本郷の大學病院で死んだのである。

時はもう午後の十時過ぎ、四邊は森閑と更け渡つて、唯病床を取り圍んだ、看護の者の太息の聲が、更に凄慘の氣を添へて居る。

突如として病人は口を開いた。而も割合に明晰な聲で、

『藤井は来たか？』

と云ふ問だ。藤井と云ふのは、稚い時から父の家に書生をして居て、

後には森川町の自宅へ歸つてからも、斷へず僕の家に入出して、種々な世話をしてくれた男だ。

が、兄とは氣が合はぬかして、あまり親しくはして居なかつた。

然るに突然のこの言葉、僕は合點が行かなかつたが、

『藤井君は居りません。』

と答へると、

『さうか……』

と、さも失望した語氣。

『何故そんな事聞くのです？』

と、聞くと、兄はさも眞顔に、

『でも……今藤井の匂がした。』
と云ふ。

いよく以て變な言葉だから、僕はもう言葉を次がず、唯傍の兩親、姉妹等と、顔を見合はせて眉を寄せた。

其後兄は、間も無く病草まり、物の一時間も経たぬ間に、遂に不歸の客となつた。斯うなると病院にも置かれず、直ぐさま自宅へ引取らねばならぬ。

が、今の様に電話も無い時節、而も夜更、人手は少し、大いに當惑した揚句、まづ第一に急を告げて、應援の手を借りに行つたのが、森川町のその藤井君！

實に藤井君は、兄の死後第一着に駆けつけて、死骸の世話をしてくれたのである。それを豫め察してか、兄の早くも匂を嗅ぎつけたのには、如何にも幽妙の因縁があるらしい。

て、當時已にその話は、一の不思議として傳へられて居たが、爾來二十年の今年に成つて、更に其不思議の度を増した事がある。

それはその藤井君が、此の一月に突然病死した事で、而もその命日が、兄と同じ二十四日たるに至つては、覺えず慄然たらざるを得ない。

藤井君、名は鈕太郎、二十歳の時會計検査院に奉職して、今年四十六歳まで、約三十年一日の如く、精勤群を抜んで、爲めに勤位を

さへ授けられた人だ。

僕はまた子供の頃、君に詩を直してもらい、素讀をさらつてもらい、寄席へ誘つて行つてもらい、遠足に連れて行つてもらい、時には父にあやまつて貰い、いや、實に世話を焼かせたものだ。

然るに僕は、君の大切な臨終に際して、その句をも嗅ぎ得なかつた。實に蟲の知らせをも感じなかつた。何たる無神經であらう。

かほど親しかつた僕との間には、何等の豫報も前兆も無く、却つて親しからぬ兄との間に、一種の暗契あるらしく見えるのは、いよ

く不思議の次第である。とは云へ、此等は不思議中の初歩で、世間にはまだ是以上の、奇

怪な事實を實驗した人があらう。が、要するに肉體の知覺は、ある程度の距離に於てのみ、その効力を奏するが、之に反して靈魂の活動は、時間に於ても、空間に於ても、無限無制のものであるから、さてこそ此種の現象を、容易に呈し得るのではあるまいか。殊に人間の死は、取りも直さず肉と靈との、アヂューを交はす時である。即ちその靈魂は、もう大方肉體を離れて、ますますその靈力を強めつゝある故ではあるまいか。

例へばかの夢の如き、これにも随分不思議がある。古人は睡眠を死の兄弟と名づけ、又は日毎の死だとも云つた。して見るとこの睡眠の間に、意外の奇夢や靈夢を見るのも、詮じつめれば同じ理窟か。

聖人に夢無し、君子は怪力亂心を語らずとか。然し聖人に非ず、君子ならぬ僕は、夢を説き怪力亂心を語るのが、どうも面白くない。

(四十二年稿)



十 樂天居士史

一

十年十度轉居頻。

稱樂天居實苦辛。

奮發今般購新宅。

借家人化借財人。

讀んで字の如く、十年來、麴町、赤坂、高輪と、居を十度轉じた僕は、去年の暮遂に借金をして、初めて我と我が家に住む身となつた。

翻つて今その十年間の、轉居の歴史を追想して見ると、轉た今昔

の感に堪へぬものありだ。いでや後日の思出に、その大略を記して見やう。

是より先、二十一歳にして初めて學校生活を離れた僕は、多少の小遣錢は取り得ながら、尙親の脛を噛ること二年、當時は書庫兼帯の二階の一隅に、形ばかりの書齋を構へて居つたので、居を其儘唯想樓と名づけた。

葉櫻や蝶になる身も居候

とは、蓋し當時の吟なのである。

二十三歳の暮、初めて新聞記者と成つて、京都へ赴任したのであるが、固定の収入は取れる事となつても、まだ獨身であつたので、

舊祖母の住んだ家の、後知人の有に歸した所に同居して、即ち萬事を賄つてもらつた。無論相當の料金を拂つて居たが、紅葉子に書いて貰つた、唯想樓の扁額は、この二階にも掲げて、朝夕東山を眺めながら、

蒲團着て主は臥たり東山

などと、乙ウすねて居たものだ。

去る程に、京都に在る事二春秋、二十五歳の暮、紅葉子の勧めやら、博文館の招やらで、再び東京に歸り、又もや膝下の人となつた。其頃父の家は、已に二度ほど變つて、今や麴町の元園町に、佗しい借家住をして居たが、それでも庭の一隅に、三室計りの離座敷があ

つたので、此所に少し計り手を入れて、間に合はせの書齋にした。机のある室は三疊、その次に水屋があつて、客でも通さうと云ふ所は、辛うじて四疊半。何れも氣取つた茶室造り、鳴居、天井が低いので、僕の如き丈高童子は、三日にあげず頭に瘤だ。

それでも住めば都の巽、世をうしとも思はれず、例の暢氣に年を越して、明くれば二十六歳の春、たしか三月の末であつた。時ならぬ南風吹き荒んで、妙に寐苦しい夜の零時半頃、けたましいすり半鐘の音に、寐入花を引ひしられて、あはて、戸を明けて見ると、眼を射る眞紅の炎。火元は一町も隔てず、而も風上の麴町四丁目邊から起つて、火の粉は空を梨地にしながら、まつしぐらに我が家へ

とかぶつて来る。

ソレ火事だ、起ろくと、家内中が總立になつて、屋根に水を運ぶもあれば、庭へ荷物を擔ぎ出すもあり。其中に見舞の人も數をまして、上を下へと騒ぐ間に、火勢は寝々と歩を進めて、已に隣家をも甜め盡したのである。否、僕の家垣根をも、遂に拉し去つたのである。

然し幸ひにも其頃から、風が少し變つたので、火先は狭い小路を隔てた、向側へと移つたので、辛く類焼を免がれはしたが、それでも最も隣に近かつた、例の僕の書齋の庇は、三尺計り焦がされてしまつた。

一時は全く祝融氏の犠牲とまで、我人共に覺悟を極めたのが、不思議に焼け残つた目出度さ、運の好さ、豈に喜ばすに居られやう。或人は、これを庭の隅に勸請してある、稻荷様のお加護だと云ふ。或人は、其前日恰も父が毫を揮つた、八幡宮の大幟の奇特だと云ふ。何れにしても難有い事だ。

二

此火事は戸數百戸許りを焼いて、其頃でも可なりの大火であつたが、この火事が蓋し元因となつて、僕はその年の秋、初めて一家を構へ、樂天居の紀元を茲に開く事となつた。

即ちその焼跡の、最も僕の家に接した所に、間も無く六室許りの借家が出来て、間取りと云ひ、體裁と云ひ、當時の僕の氣に入つた許りか、第一親の家に近いのが、何よりの好都合と、普請中から約束をして、壁が乾くか乾かぬに、はやくもこれへと調度を運んだ、

垣一つ這ひ出して尙糸瓜かな

とは、即ち當時の實情で、かく新居は卜しなから、相變らずの獨身生活。京都から連れて歸つた、一人の書生を相手に、寐る事こそは此家に仕たれ、食事は一切母屋へ通つて、父母同胞等と共にして居た。されば其家賃の如きも、臺所を使はぬと云ふ條件で、九圓の所を五十錢引いてくれた位。極めて氣樂な轉居であつたから、其儘居

を樂天居ともじつて、題額は鳴鶴翁に書いて貰ひ、これを座敷の正面に掲げた。父が樓號を吸霞樓と稱したのは、一六が休暇であつた頃の洒落で、別に呑澤山人と云つたのも、この筆法に過ぎぬのだ。間取りは玄關が三疊に、その後が四疊半、左に八疊の座敷があつて、前には三坪許りの掃庭、折り曲つて四疊半の書齋。又玄關から右の方には、六疊から臺所、その隅に二疊の女部屋、僕と書生とだけけの住居には、ちと廣過る位であつた。地界の垣根は取拂つて、母屋へは庭づたひに通ひ、時には窓から聲をかけて、用を達す事も出来るのである。

間も無く郷里から、一個の少年は上京して来て、僕の家と同棲する事となつた。それは今の黒田湖山子である。之に今迄の池田瓦山を合はせて、上下三人の男世帯。これでもまだ廣過ぎた。それを見て、尾上新兵衛事、當時の陸軍三等書記、久留島武彦子も、下宿から此所へころげ込む。瓦山子が都合で郷里へ歸ると、入れちがつて生田葵山子が来る。大分書生部屋が賑になつた。それで此等の面々が、時々僕を捕へては、文藝上の質問をする。僕も亦出來得る限りは、これに答へるのを吝まなかつたが、何分毎

日出勤の身の、ゆつくり話す間が無いので、遂に木曜日の晩だけを、此等の人々の爲めに割いて、文藝講話の時間に當てた。是れぞ木曜會の濫觴で、今から指を數へて見ると、實に十三年前の事だ。すると、これを聞きつけて、日報社の鶴崎一畝子が来る、民友社の中野其村子が来る、同志社出身の森愛軒子が来る、日本派の俳人梅澤墨水子が来る、故松菊公の遺子、木戸解劍子(理學士)が来る、西村渚山子が来る、高階柳蔭子が来る、一週一度の會日には、互ひに作物を批評したり、文藝を談じたり、古書を研究したり、また俳句を作つたりした。

尤も俳句の會には、別に紫吟社と云ふのがあつて、紅葉君が文臺

に座し、僕が之に副たりて、月一二回宛は開いたが、之には木曜會員の他に、硯友社の面々、紅葉門下の誰彼、其他新聞、雜誌に關係ある、斯道の好者が集つて、毎會揃ふ頭數は、實に三十を越へたのである。

何しろ其頃は暢氣で有た。然しあまり暢氣過ぎて、若い者の取締が付かねからと、ある時齋藤と云ふ老人夫婦に、一室を分與して、之に賄をして貰つても見たが、何しろ氣儘盛りの血氣揃ひ、昔氣質と反が合はず。折角頼んだ爺や婆やも、三月計りて手を引いてしまつて、再び元の男やもめ暮し。主の物は冠者の物、弟子の物は先生の物と、水入らずのその睦ましき。客來のあとの菓子鉢は、忽ち書生

部屋で空となり、あまり穿かずにいた筈の下駄も、いつか後が滅つて居ると云ふ仕末。それでも小言一つ出ねば、喧嘩一つはじまらなかつた。

四

斯うして二年計り経つと、今度は五番町へ移る事となつた。今度の家は平家の七室で、その屋賃十六圓。但し湯殿もついて居れば、庭も少しは廣かつた。

然しこの第二期時代は、僕はあまり記憶するを好まぬ。實にこの五番町時代は、この樂天居史中の、最も失敗な時代である。最も不

愉快な時代である。

相變らず木曜會は續き、紫吟社も開いて居たのであるが、家内に一異分子があつた爲に、第一期時代の如く、上下が暢氣に和合する事が出来なかつた。

不圖喘息に罹つて、一週間計り苦んだのも此時である。兄、友人の異見と云ふものを、初めて聞いたのも此時である。私事を新聞に素破抜かれて、一時世間を狭くしたのも此時である。而して遂に、湖山、葵山の兩子と、居を別にするに至つたのも、實に此時からの事である。尤も兩子とも、此時分からは少しづつ、収入もあつて、獨立するに難からぬ故でもあつた。

かくして五番町の樂天居は、仲夏から初冬へかけて、僅に四月計りの後に、断然引拂ふ事となつて、身はまた元の木阿彌ならぬ、元園町の元の家に、歸新居を卜したのである。

此時は古田と云ふ、不得要領の書生を置いて、淋しくも亦男世帯を張つたが、例の會は相變らず木曜毎に開いて、之に對する氣炎は、毫も滅却はしなかつた。清國人故羅蘇山子、千葉紫艸(金子)子等は、

五番町時代から加はつて、引つゞき熱心な會員となつた。此處で又一度新年を迎へると、次の春の二月になつて、妹の一人は病に斃れた。三月之が遺骨を持つて、靈山に埋葬すべく京都へ行つたが、その歸途に郷里に寄つて、姉の家を訪づれた。これは他で

も無い、人生の一大問題たる、例の結婚の事を決する爲めだ。僕は實に姉の推薦にかゝる、候補者を其家に見たのである。候補者はやがて及第して、其六月にはめて度く僕の家に入つた。それは今の妻である。其時僕は二十九歳、彼は二十歳であつた。

五

妻が出来て見ると、生活状態ががらりと變る。随つて今までの家では、やゝ狹隘を感じざるを得ない。そこで、間も無く移つたのが、土手三番町の三十三と云ふ、三々盡しの芽出度い番地であつた。室數は七つより無いが、二階が十疊に六疊と云ふので、住勝手は頗る

好い。それで家内は、夫婦に下女と書生、まだ子供が無いからと云ふので、屋賃も十圓にしてくれた。但し家主は木村芥舟先生、普通の大屋とは譯が違ふ。

二階の十疊は洋風に出来て居た。そこで早速椅子テーブルを据ゑ、あたりもやゝハイカラに飾つて見た。世界も伽喃の第一編が、そこで初めて起稿されたのも、蓋し偶然にあらずとも云はうか。

家はさして新しくも無いが、所謂家庭は新出来のホヤ、初めて自分の収入計りて、家政をヤリクラねばならぬ事となつては、主人公たる者亦暢氣でも居られぬ。

即ち従來の交際法を改めて、成るべく無駄な支出を避け、道樂に

は玉突と大弓、まづは神妙に日を送つたが、それでも年來の胃弱はむしろ此頃が一番募つて、劇しい胃痙攣を起す事數回。果は長與博士の診察をうけて、朝起療養もやれば、轉地療養も試み、冷水摩拭散步運動、随分攝生を勉めた甲斐に、一年後には大分丈夫になつた。

結婚後一年計りて、妻は妊娠の様子であつたが、ある日客を送つて二階を下りる時、誤つて階段を踏み外したのが元因で、其夜とうとう流産してしまつた。

而もそれが留守中の事で、僕は丁度玉突に遊び、何時に無い出来の好さに、得意になつて歸つて見ると、家では却つて玉無しの仕末。良人罪無し、玉を突いて悔ありとは、我ながら苦しい洒落だ。

其秋初めて新婚旅行をした。その實は里歸り。郷里から京都大阪へかけて、秋半月の漫遊は、妻にも大いに健康を助けたと見えて、やがて次の春からは、また身が重くなつて來た。

今度は大切にせねばならぬ。幸ひに三月四月も無事に過ぎた。ていよく産むと云ふ事になると、國から其母も迎へねばならぬ。さうするとまた家が狭くなる。そこでまた、例の轉居問題が起つた。同じくならば、兩親の家にも近い所をと、望んで居た甲斐あつて、幸に同じ元園町の、通り一つ隔てた所に、まづは恰好な家が見付かつた。即ちそれへと五度目の轉居！

家は下七室に二階一室。それで屋賃が十七圓五十錢。十圓の家か

ら一躍しては、聊か驚かざるを得ないが、別に無いから、仕方が無い。

此家に成つてから、太田南岳、永井荷風、綾部致軒、押川春浪杯の諸子が、木曜毎に來る様になつた。但し三番町に居る頃から、書生縁は薄くなつて居た。初の古田生は朝鮮へ。二度目の竹村生は、ホームシックで歸郷。三度目の兒玉生(花外氏の弟)は、病身でこれも家に歸つた。随つて今度の家には、書生と云ふものは無く、其代り門前の車夫が出入して、僕の送迎の外に、玄關前などを掃除して居つた。

この夏の初に、妻の母を郷里から迎へた。これに下の四疊半を明

け渡して、僕は二階の八疊へと立て籠る。
 隣には鹿兒島人が居て、毎度琵琶歌の聲が洩れ、後には琴の師匠
 が居て、朝からコロリンシヤンを聞かされ、さて向側には代用小學
 があつて、讀方の教授、唱歌の練習、果は體操の掛聲まで、皆手に
 取る様だ。

然るにこの年の六月頃極まつて、兼てから轉居好の僕は、更に大
 々の轉居をばせざるを得ぬ場合となつた。即ち僕は聘せられて、伯
 林東洋語學校へ、赴任する事となつたのである。
 願みれば妻の腹は、便々乎として日増に膨脹する。醫師の診する
 所によれば、分娩は九月十月の交。

さてまた伯林の學校は、十月に新學期が開かれるから、それまで
 には是非赴任せよと、紹介者たる都筑馨六氏からは、頻に催促され
 るては無いか。これには流石の樂天居主人も、聊か心安からざるを
 得ない。

然し此場合となつては、姑息な事を考へては居られぬ。遂に九月
 二十二日、横濱解纜の獨逸汽船で、赴任の途に上る事に極めた。
 初めこの行の極まつた時、僕はまづ博文館主に、二年間の辭職を
 申出たのである。恰も其頃、故大橋乙羽氏は世界漫遊中であり、
 又同僚の高山博士も、留學の事に極まつて居たので、一時は館主も
 頭を傾けたが、後には大いに之を賛して、それならば辭職に及ばず

在職の儘赴任したまへと、意外にも懇切な言葉、僕は永く多とせざるを得ない。

さていよいよ出発は極まつた。所がまだ子供は生まれぬ。同じくならば産聲だけ聞いて、せめて顔丈なりとも見ても、僕も、妻も、妻の母も、果は母屋の両親も、頻りに出産を待ち焦れて居ると、天も其心を憐んでか、二十二日に出帆と云ふ、その恰も十日前、即ち九月十二日の、而も秋雨の降りしきる、午前八時半頃に、安々と男の子が生まれた。

忘れもせぬ其時は、僕は山田寒山子と、二階の書齋で話をして居た。然しその二時間ほど前から、妻は例の陣痛で、一室の中に仰い

て居るのだから、僕たるものも気が氣で無い。況んやそれが初産と来て、かゝる場合に初めて出會つた僕、強いて落付を粧つて、客をあしらつては居るもの、心此所にあらざれば、其實どんな挨拶をして居たやら。

その中にオギャアと一聲！ 寒山子は逸早く聞咎めて、「や、産か。あの聲は正しく男だく。はやく行つて見たまへ！」と促がす。其言葉を背にうけて、梯子段を這る様に降りて、産所へ入ると果して男だ！ 産婆も我物の様に誇れば、妻も得意氣に微笑む、その母の顔はとける様。下女は櫛の儘入つて来て、「おめで度う御座います。」と、勇み立つて湯を運ぶ。

妻と共に重荷を承ろした僕は、早速この由を母屋へ報じると、母は急いでかけつけたが、父は生憎遊歴中で、この喜びを共にする事が出来なかつた。

産聲に燕も行つてしまひけり

と、景氣はつけて見たものゝ、さて子供の名はまだ付かない。

一體ならば父に云うて、この名をつけて貰ふのだが、それも留守では仕方が無いと、僕は即ち自ら選んで、これに三一と命名した。

それには蓋し理由がある。まづこの子の生れたのが、僕の三十一の歳、結婚後三年目の一番子、三男なる僕の第一子。妻が信ずる基督教の三位一體など、列べれば列べられるが、其實此出産の時刻が

例の向側の學校で、丁度授業の初まつた頃で、恰も九々の呼聲の、三一三十の一と云ふのが、不圖僕の耳に通つたのが、まづ抑もの動機であつた。

出産の喜びは、やがて別離の悲哀と代つた。それから丁度十日目に、僕は産褥にある妻子を後に、萬里の行程に上つたのである。

主人が居なくなつて見ると、急に家が廣過ぎて困る。所を見込まれて、其後間も無く、梁上の君子のお見舞をうけては、女計りの片時も居たゝまれず、妻の肥立ちを待ちかねて、同區紀尾井町三番地俗に清水谷と云ふ所に、年來姉の住んで居るので、其隣りへと居を轉じた。此所は三室で四圓半。

之に反して主人たる僕は、やがて伯林に到着の後、西區の某町に居をトして、これは一室が五十麻克、即ちわが二十五圓。外國に於ける主人一人の月費は、内地に留守する家族三人の生計の、約四倍に及んだのである。而も留守宅の萬事節儉なるに對して、外遊中の主人たる者も、その割に贅澤は出來なかつた。

六

伯林に在る事滿二年。その間にも三度居を移した。但しこれは例の十回以外である、番外である。

最初はアウグスブルガア町と云ふ、赤毛布には極めて呼びにくい

町の、中尉未亡人某宅の一室を、朝飯附月五十麻克で借り、次にはリユツツオー河岸の高等下宿屋に、三食附百六十麻克で住ひ、最後にはモツツ町の小官吏の奥座敷を、而も二室まで占領して、朝飯附七十麻克を拂つた。朝飯とは、畢竟バター、コーヒ牛乳丈を云ふので、これは大方寢衣の儘で食ふ位の物だから、單に部屋借住居ても、これ丈は皆附屬物になつて居るのだ。

一寸聞くと、三食附の下宿の方が、遙便利の様に聞えるが、日本と差つて彼地では、手輕で料理屋が至る所にあるから、食事はむしろ其所へ行つて済ました方が便利で、なまじ下宿屋などに居ると、定まつた時間で無ければ、腹が減つても食事にありつけず、其他食

堂の作法や何かで、下らぬ氣を遣はねばならぬ計りか、偶々交際して他所で食事をしても、なか／＼食料を差引かぬから、僕の如き非籠城主義の者には、却つて不經濟を感じたのである。そこへ行くと、最後に住んだ小官吏の所などは、高が五室より無一家の、主なる二室を借り切つてしまつたのだから、何の事は無い此方が旦那様で、夫婦者の三太夫を置いて居る觀があつた。随つて多少入費もかゝつたが、仕方が無い。

七

さて日本へ歸つて見ると、家は例の紀尾井町から轉じて、一番町

の五味坂下に設けられて居た。四圓半の長屋から、一躍二十五圓の二階造。上二室に下五室、角屋敷丈に一寸見晴しもあつて、庵末ながら新築であつたから、暫時外國住居の贅澤に馴れた主人も、敢て小言は云はなかつた。家主は誰あらう岩佐男爵。但し往來一筋を隔て、向側は五番町の角、五年前に失敗史を作つた家は、依然として朝夕僕の眼に入る。これにはやゝ閉口の感無さを得なかつたが、彼も一時、是も一時、思へばまた隔世の感ありとも云へる。

此家には、親子三人の他に、妻の母も居た。下女も二人居た。その中妻の母と入れちがつて、郷里から妻の甥が来る。また雲州から

木佐生が来る。玄關の四疊半は其まゝ書生部屋となつて、大分賑しうなつた所へ、次の年の夏には三四子が生れた。

三一の時は雨であつたが、この子の時はカン／＼日和。丁度僕は齒の療治をして、醫者から歸つて來て見ると、もう生れて居ると云ふ仕末。案じるより産むが安いと、恰も齲齒を抜く様なものだ。

撫子の今度は赤う咲いてけり

などと獨り喜んで居たが、幸ひに母子健全、三一も何とやら冗らしくなつて、僕にも大きに懐いて來た。

實は歸朝の當座は、何とやら僕を他人扱ひにして、偶々他出をする時などは、玄關の障子につかまつて、『父さん、またお出てよ。』な

ど、云つたものだ。

三四子の出産を喜んだ歳は、やがて紅葉の死別を哭いた歳となつた。それは十月三十日、前夜危篤の報を聞いて、十二時頃まで詰めかけて居たが、少し又見直して來たので、何れも眉を開きながら、一まづ家へ引揚げると、その曉にまた尾崎家からの急使で、門の戸をばげしく叩かれた時には、その門の扉より、僕の胸板は破れるかと思つた。

次の年はいよ／＼日露開戦の當時で、僕の家は逸早くも、その宣戦の日から徵發されて、馬卒數名を宿どす事となつた。その事は其頃書いた、『馬卒の宿』と云ふものに委し。

又此年の春には、直徑半町を隔てぬ、向側のある家に火事があった。折から雨上りの宵の口、而も木曜會の當日で、二階には屈竟の若者が、已に八九人も詰めかけて居たから、少しも恐るゝ事は無かつた。否、中に夾日家弟葵山など云ふ面々は、揃ひも揃つた近眼の癖に、その火の中へ飛び込んで、箆筒二棹をかつぎ出したのは、天晴お手柄と云つて可からう。但し衣服は焼焦だらけ。考へて見ると面白い。その夜の木曜會には、課題に「長閑」と云ふのを出して、手製の繪葉書を評し合つて居たのだが、ジャンくジャンと云ふすり鐘は、忽ちこの長閑を破つて、それどころでは無からしめた。

この火事にやゝ危険を感じて、程無く火災保険を附けた。尤も家は借物だから、只家財と藏書とのみに。

八

敢て火事の爲めに恐懼を爲したのでは無い。が、例の家族的膨脹は、この家をも狹隘を感じしめるに至つた。そこで遂にその年の秋には、出生の地たる麴町を離れて、遠く青山へと轉じたのである。それは丁度電車の便も、青山線が開通したからでもあるので。居は北町三丁目。例の練兵場と相接して、路次にしては廣い横町の奥、まづは閑静な所であつた。

長所はそれ計りか。まづ第一に家賃が同價で、室数が二つ多く、庭は三倍も廣い。二階は十疊に四疊半、下の間取も勝手好く出來て居て、玄關の次の八疊の如きは、子供の遊戯室にお詔向だ。て、當分は大得意。一日兩親を之に招待した所が、父も大いに満足で、有合せの紙の端に、左の即興さへ書いて呉れた。

來祝青山轉宅初。

爺娘相伴造新廬。

男孫能語女孫笑。

一座團樂樂有餘。

所が後の練兵場は、夏の夕暮こそ此上も無い散歩地なれ、冬の木枯しの時節と成ては、馬糞混りの砂煙りは、濛々として青山の天を蔽ひ、白日爲めに晦しと云はん計り、殆んど言語道斷の仕末。

尤も此所へ移る前に、土砂の噂は聞いては居たが、まさかこれ程とは思はなかつた。然し實際住んで見ると、全く想像以外の甚しさで、戸を締めても障子を立て切つても、凡そ空氣の通ふ程の所は、悉く塵埃ならざるは無して、實に箆笥の中までも、そのお見舞を受くるに至つては、誰か閉口せざらんやだ。

て、一冬は餘儀なく辛抱した。夏になると、風上になるので、もう土砂の來る氣遣は無い。所が今度は蚊がひどい。それは下水の不完全な計りでは無く、隣に寺の墓場があるからで、これから發生する蚊軍は、已に五月の初旬から無遠慮に來寇を試みる。此奴また驚かざるを得ずだ。

庭の生垣には朝顔をからませて、その盛りも十分に愛で、裏の小畑には豆を作つて、これも相應に賞玩した揚句、遂にこの年の冬押しつまつてから、更に遠く高輪へと飛んだ。蓋しこの青山にある間に、僕の一生の大事は起つた。それは他ても無い、最愛の父を失つた事である。而もその病の久しかつた割合に、その死の急であつたが爲に、遂にその臨終に會ふ事さへ出来なかつたのは、千載の遺憾に堪へぬのである。

九

是より先、父は年來の宿痾があつた。で、元氣の旺盛なるに反し

て、起居は漸次億劫になり、僕の青山の宅まで、電車の便はありながら、これを利用する事も覺束なく成た。

宿痾は前年の暮から、更に餘病を發して、正月も床の上に迎へ、春の花は窓前にのみ眺めて、秋の月こそは樓上に賞せんと、樂しみにした其甲斐も無く、夏は五月六月と、暑氣と共に病苦を加へて、遂に七月の十二日、盂蘭盆を明日、明後日に控へながら、不歸の客となつたのである。

然るに其朝は、至つて機嫌が好かつたので、見舞に行つた僕も眉を開き、また次日を期して、其夜は家で客と話をして居た。其所へ母屋から急使で、父の危篤を報じて來た。取る物も取りあへず、之

に車を飛ばせて見ると、何ぞ知らん、はもや事切れた後である。間に合はなかつたのは僕計りて無い。折から旅行中の兄は、其夜に歸りながら、三時間計りおくれ。常に同棲して居る弟等さへ、偶々散歩に出て居た爲めに、これも二時間おくれ、その臨終に居合せた者は、只母と姉と、弟の嫁と計り。父在まさは遠く遊ばずとやら僕はこの老父を有しながら、それと居を隔て、住んだ事を、今更悔んだが追付かない。せめてこれが一番町時代であつたら、或は間にも合つたであらうと、かゝる場合に出るものは、兎角涙と愚痴である。

十

青山時代に誌すべき事は、此他に尙盗難事件と云ふのがある。それも只の盗難なら、別に珍らしい事も無いが、妙な事が爲したので。時は夏の初であつたと思ふ。或夜僕は二階の十疊に、坪内先生を初め、東儀、土肥、水口など云ふ、早稻田朗讀會の連中を招いて、喜劇『誕生日』の本讀を試みた。この喜劇には、一人の盗賊が現はれて、主人公の酩酊に乗じて、首尾好く仕事を仕了せる所がある。すると其曉の、彼是三時半頃であつたらう。僕はぬるい湯に入る

夢を見て、肩の寒いので目を覺ますと、枕元の洋燈が遠くなつて居て、隣の間でコト／＼と云ふ音がする。初めは鼠と思つたが、應てスーと聞えたのは、正しく箏箏を明ける音と知つたから、いさなり大喝「誰だ」と叫んで、蚊帳の中から飛び出した。途端にバタ／＼と足音がして、曲者は庭へ飛び出したが、其物音を聞つけて、書生共が表へ飛び出した頃は、もう門の潜戸が明いて居て、當の敵は雲を霞！

後でよく調べて見たら、賊はまづ臺所から入つて、奥の間まで忍び込み。其所の縁側の雨戸を開けて、ちやんと逃路をこしらへて置いて、さて仕事に取掛つたが、その雨戸の明いた所から、サツと夜

風が吹き込んで、主人公の夢を破つた爲めに、却つて彼は目的を果たさず、遂に退却したのである。尤も箏箏の外にあつた、妻の不斷衣は攫はれてあつたが、これは被害と云ふ程のもつても無い。兎に角宵に盜賊の喜劇を讀んで、其夜盜賊のお見舞を受けたなどは、一寸一つ話に成るては無いか。

尙この青山に居る時、木曜會の第十周年を祝した。其頃は、大分畫家も加はつて、盛んに繪葉書の競技會をやつた。即ち宮川春汀子の如きは、其頃から入會したのであつた。

又、書生部屋も大分賑つた。一番町以來の木佐生の他に、會津から山内生も來た。甲州から土屋生も來た。また名も覺えぬある一人

が押かけて来たが、三日計りてこれは歸へしてしまつた。
少しづつ、家が廣く成て行くと思ふと、又置いてくれが殖えて来る。
一面識も無い地方の少年から、此方の都合は一切かまはず、自個の
希望計り陳べて、食客に頼むの、學僕に願ふのと、書を寄せて来る
事は、月に數回に及ぶのであるが、一々之を迎へて居た日には、一
家を明け渡しても追付くまい。全體これは何うしたら可いのかと、
これを友人に相談すると、おれの所にもさう云ふのが来る。初は一
々返事をやつたが、後には五月蠅つてならんから、一切手紙は握潰
したと、強硬政策を以て答へる者もあれば、不意に押し掛けて来る
推の強いには、草鞋錢だけやつて追い歸へすよと、少しは涙を加

へた返事もある。——何にしても、食客だの學僕だのは、蓋し前世
記の餘習とも云ふべきで、この生存競争の劇しい、一言に云へば世
智辛い世の中に、人に依つて身を立てやうと云ふ、青年樂天家の多
いのは、國家の爲めに賀すべき事であらうか、社會の爲めに慶すべ
き事であらうか？など、考へた事もあつた。

十一

かくて青山の砂埃には、殊の外避易して居た僕は、その爲め計り
てもあるまいが、父に別れた年の秋頃から、聊か健康を害された。
例の神經衰弱と計り思つたら、肺尖が少し怪しくなつて居る。今

の中に養生をしないと、後に悔んでも及ぶまいぜと、愆意な醫者は
警告する。それには何うしたらよいかと聞くと、まづ空氣の好い所
へ移る事、仕事を減じて精神を休める事、十分滋養分を取る様にす
る事と、此等を必要條件に數へ立てる。
そこで僕は、取りあへず旅行を試みた。時候は小春の好天氣つ
き、關西から九州へかけて、二十日計り漫遊して歸つたが、これ計
りては足らぬので、いよくまた轉居問題が起つた。
醫者の言に従へば、此際鎌倉が大磯へても、暫時隱棲するのが可
いのだらう。然し自身は、それ程に感じない。そこでこの東京市内
での、最も健康地と云ふのを標準として、専ら高輪方面を探し、漸

々その南町四十七番地、八ツ山上の新開地に、まだ新築中のを豫約
して、その壁のまだ乾きもあへぬ所へ、無理に荷物を運び込んだの
は、即ち明治三十八年の末、十二月も二十九日と云ふ日であつた。
此所は地面も家屋も、以前のよりは狭かつたが、それでも眺望は、
大崎田圃を越て、近くは目黒臺、遠くは富士山までも、二階の欄干
から手に取る様である。
されば家賃も場所柄だけに、三十五圓と云ふのであつた。恐らく
その中には、空氣税も眺望税も、多少含んで居るのであらう。
所がその眺望も、誇にしたのは僅に半歳。物の一年と経たぬ中に
近所の空地は家屋を以て填められ、折角の眺望も、爲めに全く閉が

れて、僅かに東南の一隅の、木と木の間に、それも葉の落ちて居る時だけ、薬にするほど海が見える計り。兼て眺望の吹聴を聞いて、實地探検に来た角田竹冷氏の如きは、「何時来れば景色が好いのでせう？」など、例の皮肉を云ふ位であつたが、さて致方も無い次第である。

然し空氣は正しく良いと見えて、此所へ来てから主人の健康も恢復すれば、子供等も大きに丈夫になり、其他の者も食が進むと云ふので、斯ては永住に屈竟の地と、少からず氣に入つたのである。されば此所で二度春を迎へて、その二年目の三月には、次女三八子をさへ設けるに至つた。但し此産の時には驚いた。前から少し後

れて居たので、元より油断は無かつたが、何分事が急であつた爲めに、呼びにやつた産婆も間に合はず、妻自身で取り上げるのを、僕は次の間から分娩用具を運んで、辛うじて危想無さを得せしめた位。随分滑稽な世話場を演じたが、よく聞く難産や流産に比べて、どれほど芽出度いか知れないのである。

此以前から中野生と云ふのが、又一人来て居たが、子供が一人殖えて見ると、女中も一人殖やさねばならず。さうなると家がいよいよ狭くなるので、此男は學校へ寄宿させる事にして、女中の方を三人にした。而もその三人の女中が、二疊の部屋に居ると云ふ仕末だ。然し此土地丈は動き度くない。そこで近所に空家さへ出来たら、

直ぐに見に行つては居たが、所謂る長し短し、價が好ければ、間取が氣に入らず、家か氣に入れば、家賃が折合はずで、何うも思ふ様に行かない。

するとまた友人達は、僕の懐中の都合も察せず、『寧ろ新築をしたら可からう』と云ひ、中には便宜な方法をさへ教へてくれて、建築師をさへ紹介したりする。僕もやゝ心動いて、今度は地所探しと出かけたが、これも望む場所には無い。否、あつても地代が滅方高かつたり、又地上権とやら云ふ、僕等には一向腑に落ちない、不條理な金さへ取られさうなので、到底お話に成らんのである。その中に困つた事が出来た。それは山内生と木佐生とが、相次い

て病に罹つたのである。山内生のは而も肺病。これは夏休の歸省の間に、父のが感染したのであるが、歸宅後間も無く咯血して、直ちに病院に入ると云ふ騒ぎ。木佐生はひどく腸を害して、棄て、おけば赤痢に變ずる虞があるから、これも同じく病院の御厄介。それが同時に起つたので、それには大いに閉口した。これで木佐生の方は一週間計りて退院したが、山内生は可哀さうに、二十日計り病院に居た揚句、遂に學を廢して故山へ退棲する事となつた。落膽は實に彼自身計りて無い。

それにつけても、生身を預かると云ふ事は、なか／＼容易の事て無いと、今更ながら知り得たのである。それも東京に親類があるか、

保証人でもあるならまだしも、手紙一本で頼込んで来て、只意氣に感じた計りで、之を迎へて世話をすると言ふ事は、平生は何でも無いが、かう云ふ非常な場合に望んで、一層責任の輕からぬを感ずるのだ。

それや是やで、その家がいよく厭になつて来た。この上は借金を質に置いて、建てるか買ふか、二つに一つ、はやく居を移さねばならぬと思つて居ると、待てば甘露！時節到来！不圖した事が動機となつて、遂に今の樂天居を、我手に入れる事となつた。これには取て白状する、僕の聊か躊躇して居たに拘らず、妻の英斷が功を奏して、僕が關西へ旅行して居る間に、意外に事の運んだ事を。

十二

新樂天居は室數十四、兼て望んで居た西洋室も、上下に大きいのが二室あつて、庭も可なり廣く、間取も別に悪くない。

無論出來合普請ではあるが、兎に角新しい丈が取柄だ。何の事は無い、柳原か日蔭町にぶら下つて居る外套を、買つて其儘着て居るの類。身に合はせた、否、理想通りに建てたものでは無いが、已に我家と極つた以上は、案ずるを止めよ、まづ當分は轉居問題は起らぬ。

然らばその代價は如何！これは天機洩らすまいが、貸家にすれば

八十圓。それで地代が十五圓と云ふ事だけ、一寸吹聴して置かう。蓋し僕の手には歸してからも、人がまだ住んで居た。而もそれが長者議員の某氏。多年借家住をして來た男が、一躍多額納税者を、店子に持つに至つたなどは、大いに得意ならざるを得なかつた。場所は同町五十三番地、舊居を去る事僅に二町を出でず。海には少し遠くなつたが、その代り後は崖になつて居るから、此方面の眺望は、もう妨げられる氣遣は無い。

されば、その眺望を擅にすべく、書齋は西洋風の二階に占める事にした。壘を敷けば十六枚も敷かれやう。兼て持合せの玩具類も、これならほゞ遺憾無く飾り得る。其間で『世界お伽噺』の最終編を

脱稿し、更に『世界お伽文庫』の筆を起したのは、大いに愉快に感ずる所だ。

さてこゝに終に臨で、一筆書き添へねばならぬ事がある。それは移轉後一ヶ月にして、もと居た家の隣家が火を失し、遂に全焼となつた餘燼が、舊樂天居の塀を焼き、その庇を焦がした事だ。

見たまへ！我が樂天居の開闢は、元と隣家まで類焼した事が、正に其動機となつて居る。然るにその樂天居史を結ぶに當つて、その隣家にまた火事があつた。火事と樂天居、何と不思議な因縁ではあるまいか。

但し今の僕の家には、無論保険が附けてある。

附

錄



附 録 平 戸 紀 行

平戸に姉を、岡山に姪を、兼ては門司に
友を訪ふべく、道草の京の宿を出て、遠く
九州へと志したのは、即ち、

十月十五日の日照である。此頃の天気續きに、珍らしくも今日は
朝からの雨。

七時三十四分七條を出たが、神戸で山陽列車に乗り替へる時、空
しくブラットホームに立つて、横降の飛沫を浴びる埒の無さ！ 涼
氣も急に加はつて来た。

須磨、舞子を通過するに、此邊は雨景もまた棄て難く、讀みさしの新聞脚下に閑却されて、人は窓に憑り勝ちである。

▲秋雨の淡路は淡き墨繪かな

▲幾抱松黒々と秋の雨

姫路で恰も正午に成つた。此所には高階柳蔭子の、今は戎衣嚴めしく、俘虜收容所附に成つて居るから、兼て之に沙汰をして、せめては一時間計りても、車中の食卓を共にしやうと思つたが、子は日曜日も休暇の無い身の、漸く此所まで來られた位だと、ブラットホームに立ちながらの辯解。即ち窓を隔て、ビーヤの杯を舉げ、互ひの健康を祝す中、汽車はもうビーである。

午後三時計りに岡山に着いた。義甥(日下部氏)はわざわざ此所まで出迎に來てくれた。彼は法官としてついこの初夏に赴任して來たのだが、流石職掌柄の、はや警官等には顔が賣れて居ると見えて、居合はせたサアベル先生、余の爲めにも斡旋の勞を取らうとする。四番町なる彼が家に入つて、此所で姪にも會ひ、やがて三人打連れて、此地に名高い後樂園へと出向いた。兼て聞く天下の名園。或る人は「是非見よ」と云ひ、或る人は「失望するよ」と云ふ。余は兎も角も初度の見物、つとめて公平に見たつもりであるが、決して失望はしなかつた。さりとして、絶對的に感服もしないが、何しろ見て居て、歩いて居て、何と無く胸の透く感

のする所、例の箱庭式日本庭園の中では、寧ろその豁達を稱すべきであらう。

歸途岡山神社の隣にある、大久保と云ふので晚餐をやつたが、隣は恰も今日が祭禮で、若し雨が降らなかつたら、何んなに騒がしいか知れぬ所であつた。

只聞いて驚いたのは、この祭の古例の中に、何と云ふのか知らないが、競馬でも無く、曲馬でも無く、只神前の馬場へ、近在近郷の農馬を集めて、大勢で之れを追つて、散々に責め立てるのである。かうしておけば、その馬は非常に丈夫に成つて、年中病む事が無いとやら。動物虐待防止會で聞いたら、必ず問題に成りさうな神事だ。

食後雨を侵し、闇を衝いて、主な岡山の市街を見たが、幅も廣く、家並も好く、而も店飾の進歩して居る工合は、東京の山の手邊には一寸見られぬ位。若し天氣が好かつたら、その賑がさ御覽に入れ度い位と、土地の者の惜がるのも、萬更最負目計りとも思へない。

此夜十二時十二分、再び車中の人と成つて、明くれば十六日午前七時半、汽車は宮島停車場に止まつた。昨日に反して今日の空の青さ。一葦を隔てた前面には、鬱然とした島山の、雨後の緑を滴らす中に、飛々の黄や紅、それは氣の速い紅葉かとも知られて、此處素通りは成らぬ事と成つた。

かう成ると一人旅の氣樂さ、誰に氣兼ねも相談も入らず、直ぐ車室

を飛び出して、手水は停車場前の茶屋で済ませ、荷物も其所に預けて直ぐに船場へ行けば、宮島通ひの小蒸気は、汽笛を鳴らして汽車からの客を受け入れ、已にして搖ぎ出たかと思へば、例の磯の大鳥居は、はや呼ぶに答へん計り。

宮島は十一年前に遊んだ事がある。時は恰も日清戦争の最中、大本營地の廣島に、日下部の兄を尋ねての序であつたが、今度は日露戦争の後で、岡山にその嗣子夫婦を訪うての序である。思へば不思議な因縁では無いか。など、下らぬ事を考へながら、直ちに道を白雲洞へと取つた。——紅葉谷、廻廊、千疊敷、それ等は先年見て置いたから、急ぎ旅の今度は見残し、新紅葉谷と稱へられる、この白

雲洞へ向つたのである。

来ればはや所々に、若木の械の遺憾なく紅葉して、蒼松青苔の間に點綴する眺め、御持参の色鉛筆位では、この寫生思ひもよらずと、即ち其邊の紅葉拾ひあつめ、用意の葉書にこれを貼りつけるべく、まづ傍の四阿に憩んで、女中に頼んで飯粒を運ばせた。但し此所で捺して貰つた印の、ゴム製紫肉用なるには、折角の紅葉も散々の體。紫の朱を奪ふとは、實に是よりぞ始まりけるだ。

▲御免蒙つて若木からまづ紅葉哉

然しこの白雲洞は、彼の紅葉谷に比して、前に近く海を控へて居る丈、寧ろ優つて居る觀がある。

歸途に再び社頭を過ぎれば、何所の學校の野外教練か、十四五ま
ての男女の生徒、何れも足を草鞋に堅め、背に辨當を負ひながら、
頻りに教員の説明を聞いて居る。

▲小春日や社頭に兒等が草鞋がけ

九時四十分計りの汽船に投じて、再び對岸に着けば、恰も十時二
十八分の下り列車に間に合ふ。

かくて馬關に着いたのは、午後五時十六分であつた。門司の加藤
波岑子は、わざ／＼此所まで出迎へ、直ちに小舟を雇うて、わざと
水路を春帆樓へと導く。途に安徳天皇の御陵を拜し、赤間宮に詣て、
また知盛、經盛、教盛、經種等、所謂平家七卿の墓をも弔ひ、坐る

に、壽永の秋を偲びながら、やがて春帆樓に登れば、此所にはまた、
甲午乙未の役を懐はすべき、日清媾和談判の紀念室がある。

兎角して運ばれた酒肴を、三層樓の一角に賞して、徐ろに欄に憑
れば、日ははや全く暮れて、月はまだ出でず。對岸の門司港は、只
見る燈火の點々として、わが爲めのイルミネーションかと嬉しく、
時々聞える汽笛、櫓響、轉た香港の夜泊を追想せしめた。

▲灯の數や秋の湊の酒旨し

程近い龜山神社は、昨今恰も祭禮とやらで、風が持て來る絃歌の
聲。あれはと聞けば、奉納の元祿踊と云ふ。

▲此邊り史を説く妓あり浦の秋

壇の浦懐古と云ふより、むしろ馬關竹枝と題すべしだ。

去る程に秋の夜も更けて、二十日近き月の、漸く和布刈の鼻を外

れ、瀬戸口に白銀の波碎くる頃、三井物産のランチに便乗して、波

峯子と共に門司に渡り、夜は畑田なる子が家の御厄介。此邊は即ち

日本銀行の倉宅地である。

十七日 神嘗祭の休日と云ふのに、又しても朝からの雨だ。

が、兼て申込んであるから、雨を冒して汽車路を大倉に向ひ、此

所を下りて枝光の製鐵所へと向つた。

工學士早川吉氏は、抑も此所の創業以來の技師である。即ち氏

に刺を通じ、案内を乞うて工場を一覧したが、その規模の大なる事

と、設備の整つて居る事には、我等門外漢の目の、只驚かれる計りであつた。

今日は祭日であるが、作業は休まれて居なかつたので、まづ骸炭

の工場から、燒鑛爐、熔鑛爐、送風機、熱風爐、製鋼爐、鍛熱爐、

さてはロール工場に至るまで、一々順覽する事約二時間計り。中に

も製鋼爐の火炎の凄まじさ、居ながら地獄に遊ぶの觀あつて、壯絶

とも快絶とも、評するに言葉を知らず。またロール工場の作業は、

曾てクルップでも見た通りで、まるで火の飴を製へる如く、實に面

白い見物である。

此ロール工場には、今や更に大規模の設計で、新工場が新築され

つゝあつた。
此等も例の戦後經營の一つかと、大いに頼もしく思はれたのである。

▲秋雨のコークス白く烟りけり

▲山は紅葉鐵は火花の盛りかな

正午過ぎに參觀を了り、再び大倉から汽車で歸つたが、そのまゝ波岑子の家に午後を暮らすと、夜は我が爲めの俳席が張られた。

來會の俳士には内野萬綠叢、井田韋駄天、伊藤曉門、加藤蚊十の諸士を初め、凡そ十名計り。内野氏は此地に醫を業として居るのだが、他は大方日本銀行に在つて、晝は算盤珠に親しむ連中。されば

こそ此の俳會を、日吟會とは文字りたれ。俳席の下物には、内君手製のサンドキツチ。奈良茶の代りのキリンピーヤに、俳腸は頻りに肥やされたのである。

十八日 今日父の百ヶ日に當る。が、今は旅の空、精進守る事も出來ず、心の中に其靈を拜して、朝飯が濟むと波岑子方を辭し、八時二十分發の汽車に投じて、いよく平戸へと志す。

けれども所詮今日中には行かれぬので、今夜は武雄に一泊と定め、途に箱崎、博多を見、また太宰府へも參詣した。

箱崎で下りたのは十時過、直ぐ車を雇ひ、その車夫に案内されながら、まづ八幡宮へと參拜した。誰も知る、「敵國降服」の勅額のある

る所だ。然るに丁度その回廊には、日露戦役の戦利品が陳列され、
之が爲めに參觀人も、亦可なり賑つて見えた。

▲荒神の留守もる武器々々かな

今朝門司で買った新聞によれば、日露の媾和はいよいよ成つて、
條約の正文も發表されたのである。その新聞を讀んだ眼で、此所に
此の戦利品を見ると、又一種の感が湧いて来る。

否、その感よりも、次いで千代の松原を過ぎて、日蓮上人の銅像
や、元寇紀念碑を見るに當つて、更に胸を衝いて來たのは、一種言
い難い感慨であつた。が、此所は其場合で無いから、黙つて只銅像
を見あげるに、さりとは日蓮殿の態の悪さ！これを長く見て居る

と、晩にはうなされさうである。

▲怪僧の雲衝く上や雁渡る

これから見ると、元寇紀念碑の龜山帝は、流石に威風四邊を拂つ
て、自づから頭を垂れるのである。

この地は公園と聞くに、實は天然の松原を利用したまで、別に人
工の景致は無く、只二三の旗亭を見る計り。

▲松の香や車上に秋の風ぬるし

と、ゆられくつて行く程に、道漸く博多の町に入る。九州一の繁
華の地と聞いたが、何分町幅が狭いので、何うやら心落ちつかず。

一寸福岡の町を覗いて、あれが縣廳と車夫に指された邊から、また

後へ引返へさせたが、名物博多人形も、精巧に過ぎては面白からず、今は銀座でも買へるわと、其店も通り過ぎて、直ぐ停車場へと來た。乗り込んだのは十二時の汽車である。

▲草紅葉あたら鏡區に入らんとす

▲草の花列車の風に靡きけり

など吟じて、窓外の景を賞するの、此邊一帶の楡林、九州の紅葉は之に止めると聞いたが、それにはまだ一月ほど早い。

二日市で又下りて、直ぐに鐵道馬車に乗り、天拜山を後に見乍ら、三十分ほど揺られて、太宰府の町へ來た。馬車を出ると、直ぐ天満宮の參詣道で、幅の廣い石畳、丈の高い銅の華表、流石天神様の總

本家と、先以て難有味が知られる。

境内に入つてから、更に余を驚かしたのは、お約束の太鼓橋でも無い、評判の飛梅でも無い、(樓門の結構は焼けて今無いが)むしろ楠の大木の多い事で、幾抱へとも知れないのが、枝は雲を掃ひ、幹は苔に蒸され乍ら、其所此所に爵蒼とした工合が、如何にも小氣味よく感じられた。社殿に參拜して、まづ文運の長久を祈つてから、社務所へ行つて御守札を受けた。まづ所柄の雷除を初めとして、開運、安産、病難除など、一通り授けられたが、序に卵杖と鷲をも乞ふたら、これは時期で無いので断わられた。

歸途は門前の一木屋に休んで、又しても例の葉書製造。社殿の繪

葉書に、飛梅の落葉を貼つたのと、病難除の守札に、名物天拜山艾の包紙をつけて貼つたのは、我ながら御趣向の方かと思つた。已にして又馬車に送られ、再び二日市の停車場に着いた時、偶然石橋忍月子に會つた。子は今長崎に辯護士を業とし、傍ら長崎新報にも關係して居るのだが、昨日以來此邊に遊んで、是から長崎へ歸るのだと云ふ。即ち車を共にして、厚意で抜いてくれたピヤに、十年振の舊交を温め、列車の武雄に止まつた時、名残のコップを干して別れた。

武雄温泉は停車場から七八町、蓬萊山の麓にある。余の之に車を飛ばして、東京屋と云ふ旅館の玄關に着いたのは、午後六時頃であ

つたらう。

然るに此家は上を下への雑踏、中には藝者らしい者も五六十人見えて居る。何う云ふ事かと尋ねると、今日は此地に英國水兵の歓迎會があつて、その來賓は大方歸つたが、佐賀から來た接待の官吏や藝妓共が、まだ此所に晚餐をして居るのだと云ふ。

悪い所へと思つたが、今更他へも移られず、餘義無く薄暗い小部屋に入り、生温い澁茶を呑み、兎も角も一ト浴と、浴場へ案内されたが、これも思つた程感心出來ず。浴後町を散歩して見たが、さて何も見るべき物は無く、温泉と云へば直ちに宮の下、塔の澤を連想する、我々東京人士には、何うも十分の感興が起つてくれない。

其中に宿も静まつた様なので、再び歸つて見た時には、もう先の連中は去つて、余の部屋は兎も角も床の間のある、他の四疊半に移されて居た。

先刻から時刻の後れた故か、晚餐は案外甘く食つて、後は按摩を取らせ、ゆつくり眠らうとすれば、やがてまた別室で、けしからず笑ひさゞめく聲。さては居残り連もあると見えた。

▲湯の秋をある夜更共の妓を聘す

十九日 明くれば今日も天氣は好い。樓前の蓬莱山、奇岩高く聳へ、怪松斜に蟠まつて、登れば勝地もあるべく思はれたが、時刻を急ぐので下から見て置き、朝餉をそこくに済まして、七時二十分の汽

車に投じ、今日こそ平戸行の船に乗るべく、佐世保へと向つたのである。

佐世保に着いたのは九時頃。直ちに船宿に行つて、東豫丸と云ふのに送り込まれたが、さてこの船の小なるよりは、それへ行く通船の乗場の、頗る野蠻的なるには、大いに驚かざるを得なかつた。

何の事は無い、江の島の兒が淵を見る様な、断岸の下、絶壁の陰、下駄ではとても歩けない位な、足場の悪い所を降りて、漸くにして通船に乗り込む。日本一の軍港と呼ばれて、最も新式に開かれた此地に、まだこんな棧橋があらうとは、誰も思ひ及ばぬ事だ。

さて船も船だ。長崎の五島まで通ふと聞いたに、噸數僅に九十六。

形計りの二等室の、疊二枚ほど敷いた所に、まづ荷物だけ置いて、大方は欄干に凭れて居たが、さて景色は流石に好い。惜しんでも尙餘りある、彼の名艦三笠號が、鏡の様な水面から、恨めしさうに半身現はして居る外には、軍艦らしい物は更に見えない。それもその筈か、二三日中には東京灣に大觀艦式があるので、艦隊は皆其方へ行つて居る。さてはこの十月の事を、今から艦無月と云つたらよからう、など、獨り駄洒落れた所で、相手に成る人も居ず。其中に俵の浦の檢問所を廻つて、船は平戸の九十九島へ掛つた。

九十九島！ 名を聞いてさへ景色が思はれやう。その名所を右に

見て、左の島山は即ち平戸、その内地に面した所に、彼の千里の濱があるのだ。千里の濱とは誰も知る、國性爺の出生地で、今も立派な記念碑が、其地に立つて居ると云ふ事。

其中に、左右の陸が漸く迫つて、一道の瀬戸を爲し、彼方に木深い小島に見える所へ來て、船は間の抜けた汽笛を鳴らした。もう平戸に着いたのである。

見れば古びた町家續き、その後は山手に成つて、飛々に大きな屋根のある所、それが元の松浦侯の城下、即ち平戸町なるもの。

飛んでも届ささうな所を、通船に送られて棧橋に着けば、義兄(竹中氏)は此所まで出迎へて、そのまゝ其家へと案内する。

陰氣な町を行くこと四五町、途中から右へ切れて、山の畑地の間を登れば、雲を掃ふ松一木、松の下には石垣、冠木門、見るから舊士族の邸と見えるのが、即ちその家であつた。

門を入ればはや夫と氣づいて、姉は子等といもに、玄關まで迎へて出る。蓋しこの一家とは、殆んど二十年振で會ふものを、互ひに無事を祝し、健康を喜ぶほどに、暫時は歡笑堂に充ちて、空には秋の雲こそ通へ、此所ばかりは春の風の、頓に袂を吹く感である。

一體平戸と云ふ所は、昔の開港場の一つで、當時は大いに開けたのが、近年漸く衰へて、今はむしろ寒寂に失して居る。然し天然の氣候は今も變らず、夏は涼しく冬は暖に、頗る健康に良いと云ので、

一時腦病に悩まされた義兄は、先に長崎の控訴院を辭して、我から此地に轉住し、悠然田園生活を試みて居るのだ。

然し彼の日本海の大戦の時は、砲聲般々として手に取る様に聞え、何うやら好い心地もしなかつたが、中には好事な連中の、わざ／＼山上まで見物に行つた位だと云ふ。

晩餐前に後の山へ登つて見たが、此邊は皆此家の畑地に屬して、ある所には野菜を作り、ある所には果樹を植ゑ、またある一廓には、惣領の甥のすさみとして、此頃は家禽を飼うて居る。此等を見てもこの種の生活の、如何にも趣味あり氣に見えて、羨ましさは耐へなかつた。

夜は一家族一堂に集まつて、和氣霽々たる家庭の談笑、六歳になる子の余と同名の末の甥までが、遂に眠氣を訴へなかつたのを見ても、如何にその樂しかつたが知れやう。

二十日 昨日の暖さに似ず、今日は風冷かに、空さへどんより曇つて來た。午後には出立せねばならぬ身の、急いで見物に出かけたが、元より此島中の名所は、とても一日二日では廻れず、さりとて此町の内には、舊城趾の他は無いので、まづそれへと導かれた。

城趾は海に臨んだ岡の上にあつて、老松古柏鬱蒼たる邊、今も天主の名残を留めて、傍には龜岡神社なるものがある。

またこの社と相對して、道を隔てた岡の上には、平戸中學校が立

つて居る。これは猶興館と云つて、元は藩主の開いた學校であるが、今は縣立に成つて、石橋思案氏の親戚、桐山氏が校長に成つて居る故、即ち之を訪問したが、残念ながら授業を參觀する間は無かつた。

然し氏の語る所によれば、此校の生徒は一般に順良で、土地柄とは云へ、漕艇と游泳とは、殊に長じて居ると云ふ。

さて龜岡神社に詣てるのに、今は何の眺も無いが、春はさこそと思はれる櫻の、其數百株餘り、而もその櫻の種類が、一本毎に異つて居るのは、殆んど他にはあるまいと云はれて、此所の藩主の好事を、今更の様に感ぜざるを得ない。

また町へ廻つて見ると、此所に名代の橋がある。只見る十間にも

足らぬ川に、見事な石造の反橋。是こそ日本最古の石橋で、昔和蘭人の設計に係るものとやら。

十時過にはもう家に歸へり、甥が手飼手料理の家鴨に、舌鼓を打ちながら晝餉を濟まして、盡きぬ名残を惜みながら、急いで支度を整へ、姉と末の甥には、例の松の木の下まで、義兄と惣領の甥とは、町の船宿まで送られて、十二時の船に乗り込まうとした。

然るに何事ぞ！元より百噸にも足らぬ船は、今朝の風に恐怖を爲して、五島の港を出なくなつたので、自然此所へは來ぬと云ふ電報が、先刻郵便局まで届いたと云ふ。

南無三！此島に罪も無い身を、此まゝ俊寛を學ぶ事かと、余は

聊か面喰つたが、義兄は更に驚かず、さらば車で歸へれと教へる。

車？此島から何うして車が？と云へば、それは田平の渡を渡

つて、陸路を佐世保へ向ふのに、夕方までには着かうと云ふ。

之に活路を得た余は、直ちに一臺の人車を雇つて、さらばくと

此町を走り、彼の名物の石橋を渡つて、中學校前の切通しを越え、

行く事三四丁、崖路を下つて渡船場へ來た。

此所から平戸の瀬戸を横切れば、彼方は即ち田平である。

車夫は便船をやり過ごして、特に一艘を借り、車と共に余を乗せ

て、自分分は船頭を助けて櫓を押したが、物の二十分とたぬ中に、

はや田平に着いてしまつた。

舟から車をかき上げると、車夫はまた櫓を梶棒にかへたが、やがて最寄の立場茶屋に寄つたから、草鞋でも買ふとかと思へば、大きな握飯三個を取つて、途々これを口にしました。彼はまた午飯前だったのであらう。

かくて峠路に掛つたが、後に平戸の白岳は見えながら、海之音も聞えない。穂の短い芒原の陰から、ひらくくと岩の動くを見れば、それは此邊に放飼にされる、農事用の牛なのである。頼光ならば身構もせう所を、余はむしろ好書題として、却つて急旅の車上なるを悔んだ。

▲穂芒の峠に牛の背を餘す

兎角して峠を過ぎれば、道は稻妻形の急坂と成つて、眼下は正に碧瑠璃鏡。是こそ田平灣なるもので、その景致寧ろ箱庭式ながら、萱や芒の凡山に漸く飽きた眼は、此所に思はず蘇生の感をして、我知らず快を叫んだのである。

この灣の極まる所が、即ち江迎の里である。車夫は此所で新手と代つたが、生憎雲を翻れ出した時雨は、轉た遊人の腸にも染みなが、幸ひにも此所より先は、道再び山に通じて、景は即ち凡ならず。此夏の大雨に、橋と云ふ橋大方は落ちながら、其所に却つて詩趣があつて、屢々徒歩を餘儀無くされ乍ら、それも小言を云ふ氣には成らなかつた。

▲車昇いて渡る橋あり秋の水

殊に江里峠の奇勝は、真に此行の拾物である。只見る山上の奇岩は、猛虎の風に嘯ぶくとも見立つべく、溪間の長松は、神龍の雲に攀ぶるとも譬へられ。彼の伊勢路の山如きに、筆を棄てたと云ふ書工をして、一度び此前に立たしめたら、それこそ硯を割つて逃げ出すだらう。

この峠を下りると、里は佐川となり、大野と成る。かくてまた一つの峠をこえて、相の浦附近まで来ると、所々の路傍に、白きペンキ塗の杭を立て、要塞第三地点、第二地点など書いてあるのに、漸く佐世保近いを知りながら、懷中に時計を探れば、もう五時は過ぎ

て居る。

平戸を出てから約六時間、俗に十里と稱する道を、初度なればこそ、また景の一層好く見えて、幸に退屈こそしなけれ、曇る日の風の寒さに、折々時雨の交じると、車疲れの腰の骨の、大分痛く成つて来たには、勢ひ旅の衰れを知りそめた頃、日は全く暮れて、軒の燈の流石に繁き、佐世保の町へと入つたのである。

乗車の便を思つて、わざと停車場前の茶屋に投じたが、豫定の汽車には遂に後れて、此上は十時の夜行を待たざるを得ぬ。

曲んだ障紙の隙間から、汐風の無遠慮に吹き込む部屋で、米か飯かを判じ兼ねる位な、茶碗の中の物を無理につめ込んで、覺束無く

も腹を拵へたが、さて時間は大分ある。
一體此佐世保では、軍令部、海軍病院等の人々に、それ／＼面會の便を得て居たが、夜分ゆゑそれも差し控へ、獨り市中の見物に出かけた。

が、町は新開だけに、商店は流石に花やかに見えだが、例の艦無月の事であるから、思つたほど賑かて無い。

其所此所で買物する序に、只ある繪葉書屋へ入つて、此の土地の尋ねたら、「此所は軍港で御座いますから、寫眞は取られませんので」と云はれて、思はず頭を搔いた。

まだ發車には一時間もあるが、足も漸く疲れたから、一ト先づ茶

屋へ歸つて見ると、店頭の雨戸は半分閉され、中に若い者五六人車座に成つて、一人の女太夫を圍み乍ら、頻りに浪花節を聞いて居る。元來此種の語物は不幸にしてまだ熟聞の機を得なかつた余は、此機會を利用して「實録累物語」とやら云ふものを、前後三段まで聞くを得た。其三段の畢つた時、停車場の鈴は鳴つたので、余は恰もその汽車に運ばれて。

二十一日の午前五時、門司に着いた。星を戴いて停車場側の徳光館に憩ひ、

▲身に染むや朝着く宿の窓の音

など呻いて、日漸く上る頃、また波岑子の居を訪うて、無事の歸

明治四十二年七月十八日印刷
明治四十二年七月二十五日發行

小波ハンモック奥附

定價金六拾五錢



著者
發行者
印刷者
印刷所

巖谷季雄

龜井齋平

太田音次郎

株式會社 秀英舍

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

龜井商店書籍部

(振替口座第八六八九番)

東京市京橋區北紺屋町
城邊河岸五番地

發兌元

早稻田大學
講師

菊池 晚香 先生 共譯
林 南 軒 先生

新刊

莊子 和 解

●●● 全
定價 金 四 十 五 錢
郵 稅 金 四 錢

東西古今、學理の深奥と文章の巧妙と、莊子^{を以}て
第一^{とす。}而して冗漫^{の解釋は、簡練の如}かず。此書は、譯者多年の經
験^{を以て、最も}巧^{なる}和^讀と文章とを練習する得べし。
一讀^{て以}て學理と文章とを練習する得べし。

發兌元

東京市京橋區北紺屋町
城邊河岸五番地

龜井商店書籍部
(振替口座第八六八九番)

●高須梅溪先生著

學生坐右訓

冊一全

上製定價金五十五錢 郵税金四錢
並製定價金四十五錢 郵税金四錢

●早稻田大學講師安部磯雄先生著

野球案内

冊一全

定價金十二錢 郵税金二錢

大和田建樹先生閱
田中常憲先生著

源實朝 金槐和歌集註釋

冊一全

定價金三十五錢 郵税金四錢

中村春雨先生
高須梅溪先生 共著

女子修養の鑑 女子ト宗教

冊一全

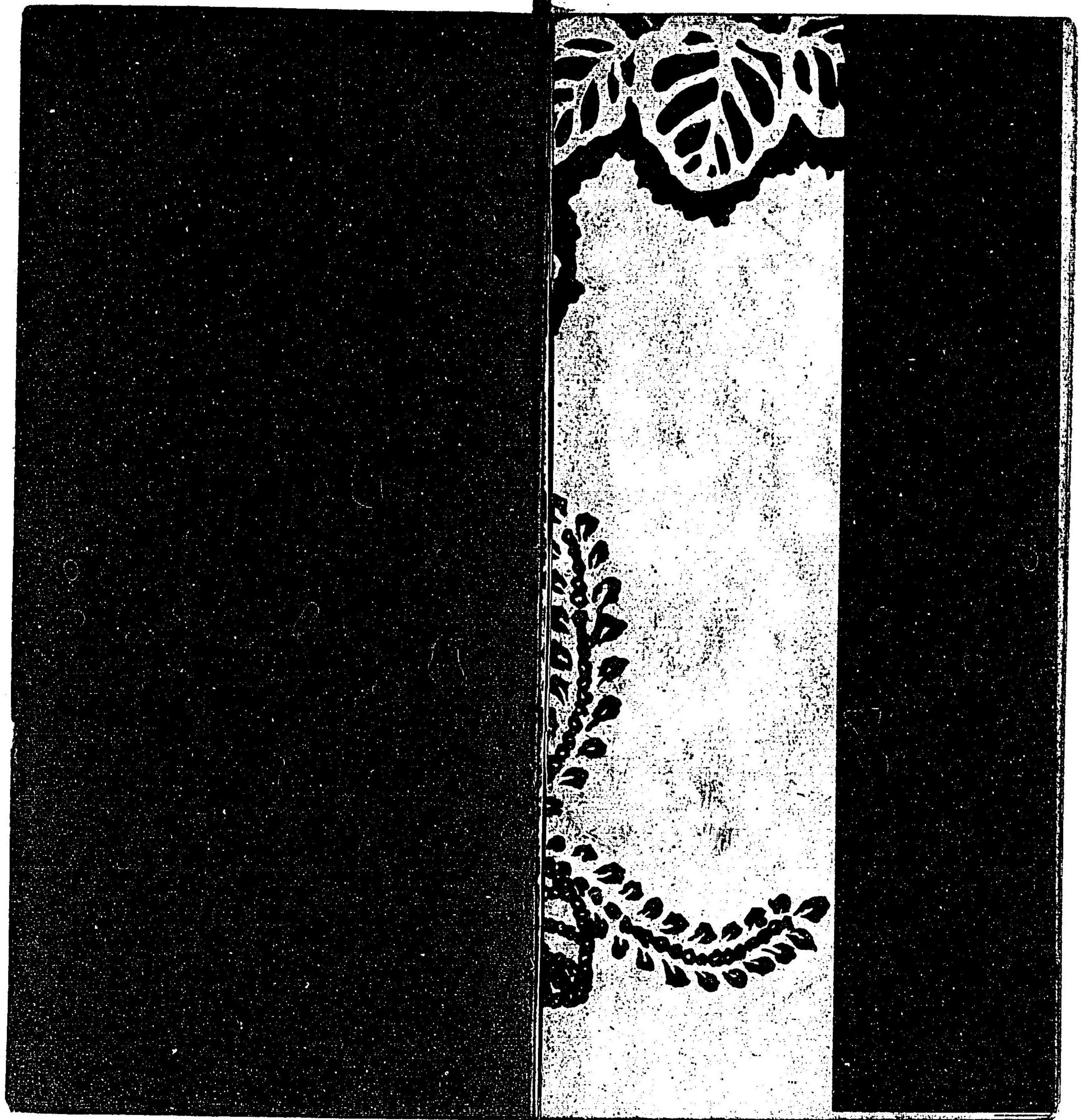
定價金五十錢 郵税金六錢

發兌元

東京市京橋區北紺屋町
城邊河岸五番地

龜井商店書籍部

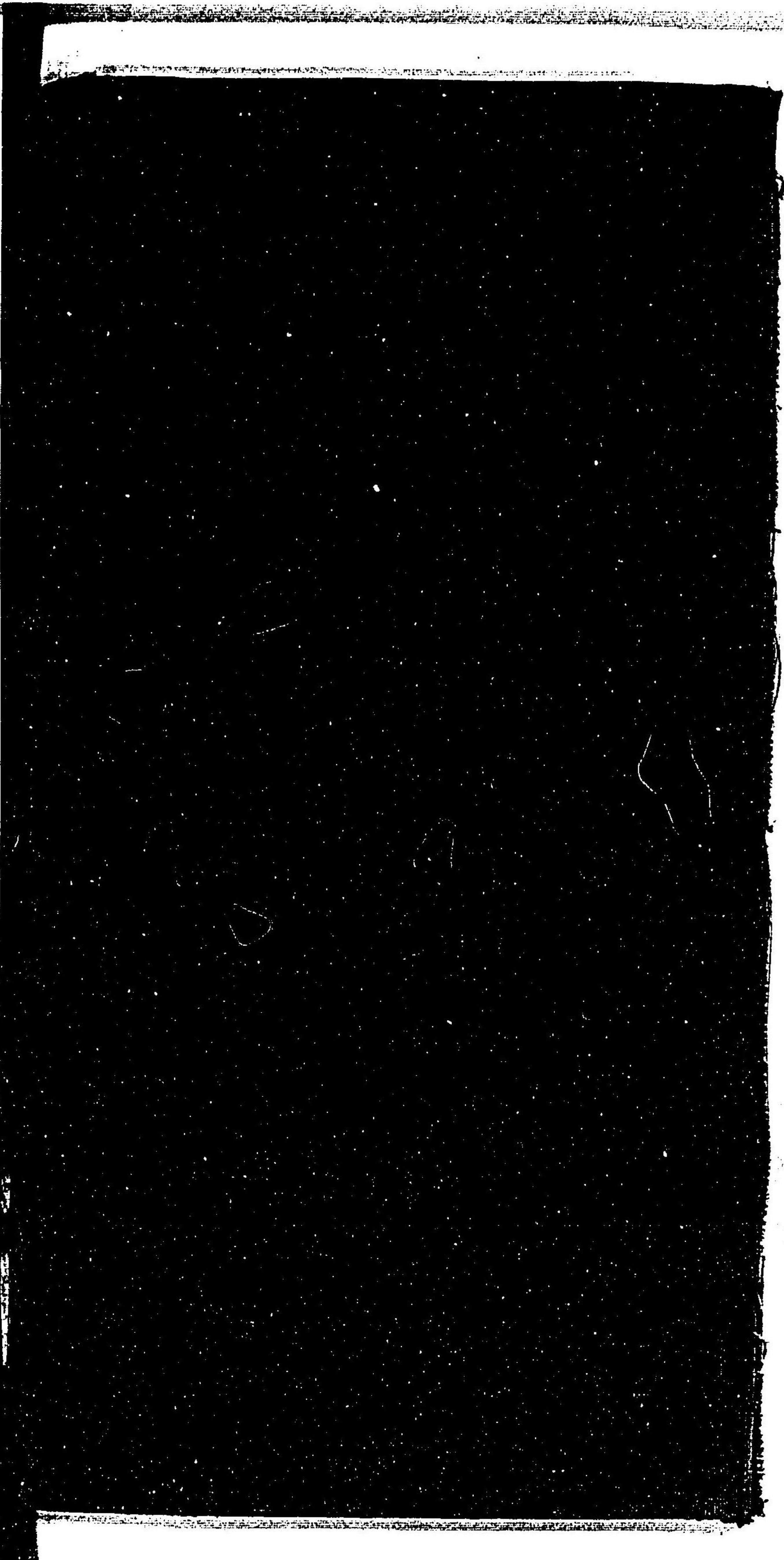
(振替口座第八六八九番)



32.
412

3

!





096234-000-6

32-412

ハンモック (小波小品)

巖谷 小波 / 著

M42

DBR-0513



